

研究主題「共に生き、よりよい社会を創ろうとする態度を育てるために

～中学校の『総合的な学習の時間』における

ボランティア活動への意欲を高める指導の工夫～」

東京都教職員研修センター研修部経営研修課

府中市立府中第一中学校 教諭 酒井 佳子

研究のねらい

平成7年1月に起きた、阪神・淡路大震災での、延べ140万人のボランティア活動は、日本人にボランティア活動に取り組む勇気を与えた。このことを機会に、その活動の大切さが注目され国の施策や東京都の方針としても子どもの心を豊かに育てるボランティア活動が重視されるようになった。ボランティア活動の意義を多くの国民が理解しているのにもかかわらず、中学校でその活動に継続的に取り組んでいる例はまだ多いとはいえない。その理由として、ボランティア活動が、中学生の心を豊かにはぐくむ効果を実践に基づいて実証している例が少ないこと等が挙げられる。そこで本研究では、子どもたちに「共に生き、よりよい社会を創ろう」とする態度を育てる目的で、ボランティア活動による、子どもたちの心情の変化を意識調査の分析で明らかにした。その分析に基づき活動への意欲を高める指導の在り方を追究し、中学校の「総合的な学習の時間」のカリキュラムを開発することをねらいとした。

研究の内容と方法

1 基礎研究 答申、先行研究の調査

(1) 学校教育でボランティア活動を推進する意義

社会奉仕体験活動等の青少年にとっての意義は、共感、自己存在感、社会の一員としての実感、思いやりの心等、生きる力をはぐくむことができることである。(「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」平成14年7月中央教育審議会答申)

(2) ボランティア活動の現状と課題の把握

東京都教育委員会では平成19年度から、東京都立高等学校全課程で在学中に1単位以上、必修科目として奉仕体験活動を行うこととした。これを受けて小・中学校の総合的な学習の時間にボランティア活動の重要性を認識し、展開することが期待されている。

2 調査研究

表1 ボランティア活動前の意識調査結果

ボランティア経験の有無による、活動への意欲、外からの働きかけが必要の差をt検定後、活動への意欲、外からの働きかけが必要を独立変数、思いやり意識、思いやり行動、充実感、自己有用感を従属変数として単回帰分析を行った。 (平成16.7.9実施 対象 中学校第1学年 生徒160名)						
意識調査結果	ボランティア経験有	ボランティア活動への意欲 高い	0.286**	0.408**	0.481**	0.345**
		外からの働きかけが必要 低い	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
	ボランティア経験無	ボランティア活動への意欲 低い	n.s.	0.295*	0.404**	n.s.
		外からの働きかけが必要 高い	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
n.s.無相関 *5%水準で有意差有 **1%水準で有意差有 (相関係数が0.2以上0.4未満はやや相関がある。0.4以上0.7未満はかなり相関がある。)						

ボランティア活動への意欲と、思いやり意識、思いやり行動、充実感、自己有用感(自分は役に立つ存在だと感じる気持ち)との関連について生徒の意識を把握しその傾向を分析したところ、次のような結果を得た。ボランティア経験がある生徒は経験がない生徒に比べ、ボランティア活動への意欲が高いことが示された。また、経験のある生徒のボランティア活動への意欲と思いやり意識、自己有用感はやや相関があり、ボランティア活動への意欲と思

いやり行動、充実感はかなり相関があることが示された。

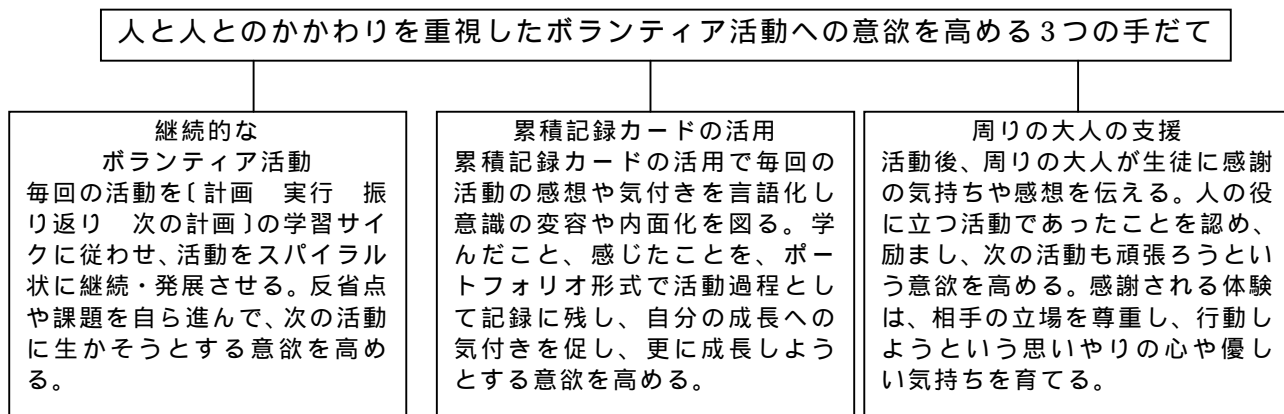
そこで、ボランティア活動の経験の無い生徒に経験させることによって、活動への意欲を高め、思いやり意識、思いやり行動、充実感、自己有用感も高められると考えられる。(表1参照)

研究の経過と考察

1 ボランティア活動への意欲を高める手だて

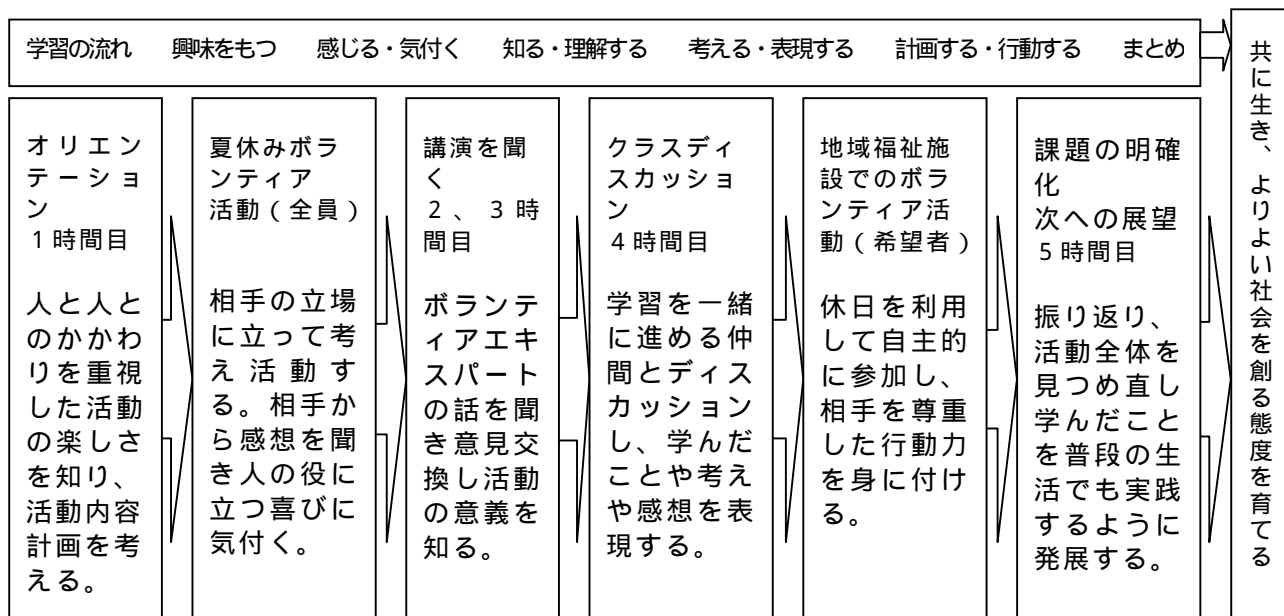
意識調査結果の「ボランティア経験がある生徒は活動そのものの楽しさを求めようとする意欲が高いこと、思いやり意識、思いやり行動、充実感、自己有用感も高い」ことから、「人と人とのかかわりを重視したボランティア活動に取り組み、活動を継続させているうちに、心の交流を体験し、活動の楽しさを知り、活動が充実するだろう。さらに思いやりの心がはぐくまれ、自己有用感が高まり、共に生き、よりよい社会を創ろうとする態度が育つのではないか」という仮説を立てた。そのためには、子どもたちが自ら進んで活動に取り組むよう、意欲を高める必要がある。そこで、ボランティア活動の中心に人と人のかかわりを位置付け、次の3点の手だてに留意することが大切であると考えた。

図1 人と人のかかわりを重視したボランティア活動への意欲を高める3つの手だて



2 人と人のかかわりを重視したボランティア活動のカリキュラム

図2 人と人のかかわりを重視したボランティア学習のカリキュラム



人と人とのかかわりを重視したボランティア活動への意欲を高める3つの手だて(図1参照)を生かした指導をすることにより、活動を継続する中で、心の交流を体験し、楽しさ、充実感、自己有用感を高めること、更に、「共に生き、よりよい社会を創ろう」とする態度を身に付けた生徒を育てることを目標にカリキュラム(図2参照)を考え、検証授業をした。

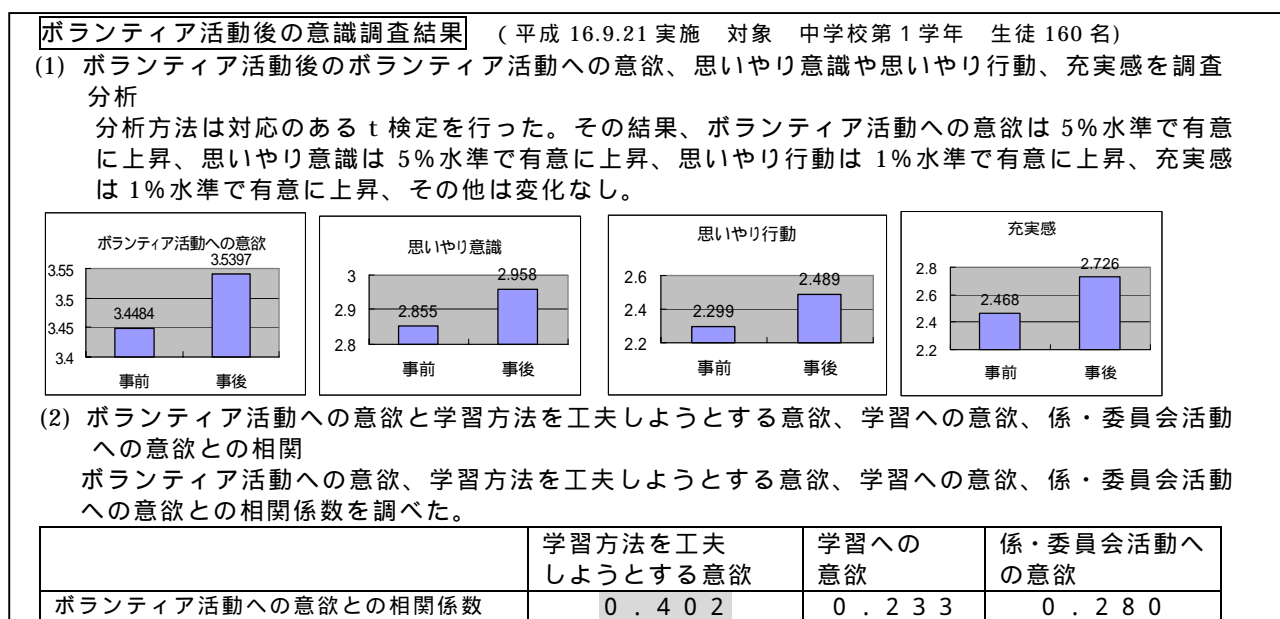
3 本研究で取り組んだボランティア活動の概要

すぐにボランティア活動に取り組めるように、身近な心遣いや行為等の人の役に立つことに自分から進んで取り組む計画を、生徒一人一人が考えた。そして、活動を通じて、心と心の交流が生まれるように、人と人とのかかわりを重視したボランティア活動に取り組むこととした。活動場所、時間等はそれぞれの生徒が取り組むボランティア活動によって異なるので、自由な時間が確保しやすい夏季休業の前後の時期に設定した。その結果、地域のボランティア活動に自主的に参加し、家族の一員として積極的に地域にかかわることもできた。

4 ボランティア活動の意欲の高揚の検証

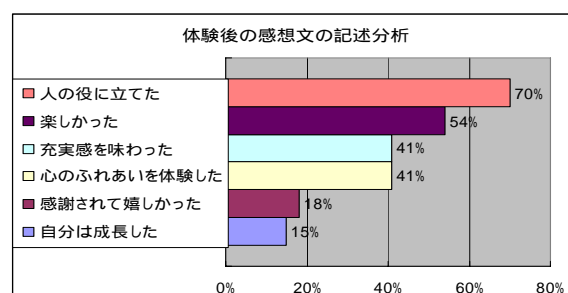
活動後の意識調査の分析により活動体験後の生徒のボランティア活動への意欲、思いやり意識や思いやりの行動、充実感が高まった。また活動の意欲の高まりとともに学習の方法を工夫しようとする意欲、学習活動への意欲、係・委員会等への活動意欲も高くなる傾向があることが分かった。(図3参照)

図3 ボランティア活動後の意識調査結果



自己有用感については、学年全体としては値の上昇は見られたが、有意差は認められなかった。その理由は活動後、累積記録カードへの記録で自分の内面を深く見つめ、自己有用感の値が若干下がった生徒がいたことにある。しかし、その後に書いた感想文の記述を分析したところ152名中107名の生徒に人の役に立てて良かったという記述が見られ全体の70%を占めた。その他の記述の主なものでは、楽しかった、充実感を味わった、ふれあいで心の交流を体験した、感謝されて嬉しかった、

図4 ボランティア活動体験後の感想文の記述分析



自分は成長した、

成長した等が分析され、人と人とのかかわりを重視したボランティア活動の生徒の満足感が高いと考えられる。(図4参照) 今回の活動では、保護者や相手から感想を聞いたことにより、自分の活動が、人の役に立った活動であることへの気付きを促した。感謝されて嬉しかったという記述から、生徒の活動を認め励ますための周りの大人の支援は、ボランティア経験の少ない中学校一年生の活動への意欲を高める効果があったと考えられる。

5 ボランティア活動の成果と総合的な学習の時間のねらいとのかかわり

(1) 学習への意欲や係・委員会活動への意欲の高まり

総合的な学習の時間のボランティア活動の取り組みや学習を通して、生徒一人一人が自ら課題を発見し、解決策を考え、進んで行動し改善に取り組んだ。知識として理解している内容が、社会の問題を解決する際に役立つことを実感し学習意欲が高まった。自分ができることは、進んでやるのが当然のことであることに気が付き、普段の学校生活でも、係・委員会の仕事や行事に進んで取り組もうとする意欲が高まった。(図5参照)

図5 生徒の感想より
ボランティア活動に取り組んで、高齢者の方が使いやすい車椅子やベッドを作る仕事に就いてみたいと考えようになった。そのために、今の学校の勉強をまずやらなくてはいけないと思った。それから、係や委員会などの仕事や行事など、自分ができることは頑張ろうと思った。

(2) 考え方や態度の変容

活動後、ボランティア活動でかかわった人から感想を聞き、自分の活動を振り返り、活動の意味を見つめ直し、解決策を考え出したことは、生徒の問題の解決に主体的、創造的に取り組む態度を育て生き方についての考えを深めることに、つながった。ボランティア活動を継続し

図6 生徒の感想より
初めて高齢者福祉施設にボランティア活動に行き、相手の方からありがとうと言われてとても嬉しかった。それ以来、高齢者と話すことが楽しみで、疲れても楽しいので活動を続けている。私の活動が相手の役に立つといいなと思い、笑顔で接し相手も自分も楽しくを心がけている。高齢者との交流を思い出すと、また話に行きたいと思う。ボランティアを体験してから、電車の中で座っているときに、高齢者や障害者を見かけたら、必ず席を譲るようにしている。

ているうちに、ボランティアという言葉が必要なくなったときが「共に生き、よりよい社会」が実現できたときであろうということに生徒たちは気付いた。自分たちが生きる社会をよりよくするためには、まず、身近で困っている人を見かけたら、進んで手助けを申し出、行動することが大切であることを学んだ。(図6参照) 仮説に基づき、意欲を高める手だてを活用し、人と人とのかかわりを重視したボランティア活動を継続させ、心の交流をし、相手のことを思いやる心や行動、充実感、自己有用感をはぐくむことを通して、「共に生き、よりよい社会を創ろうとする態度」を芽生えさせたと考えられる。この人と人とのかかわりを重視したボランティア活動が学年進行とともに継続、発展すると更に「共に生き、よりよい社会を創ろうとする態度」として定着すると考える。

今後の課題

今回の人と人とのかかわりを重視したボランティア活動は中学校第1学年の総合的な学習の時間の学習での実践だが、私が地域で子どもたちと活動に取り組んだ経験から、このカリキュラムは中学校第2、3学年、小学校、高等学校でも応用できると考えている。今後学年進行に伴い更に活動が継続されるよう小学校、高等学校とも連携しながら活動を推進していく。